謹賀新年

平成十一年元旦

第　17　号
発　行
小松同窓会本部
〒923－8646
小松市丸内町二ノ丸15
石川県立小松高等学校内
同窓会報編集委員会
TEL・FAX (0761)21－6330
印刷　北陸印刷株式会社

母校愛の結集力を願う

堀口　外茂雄

今年は、いよいよ我が母校の創立百周年に当たります。

数年前の小松同窓会常任理事会の時、私は、徳田八十吉会長から協力を頼むといわれ、同窓会役員に加えられました。そして、副会長の指名を受け、百周年記念事業の募金委員長を命じられました。還暦を過ぎた私などその任ではない、もっと若い元気のある人にと、再三お断りしましたが、どうしても聞き入れてもらえませんでした。

結局、私のような者でも、母校のために少しでもお役に立つならと、お引き受けすることとなってしまったものの、その任の重大さにいまさらながら胸を痛めています。そして当年を迎えてまさに「いよいよ」の感が強くなっています。毎日のように事務局に募金状況を問い合わせ、母校愛熱き同窓会員の皆さんのご協力・ご支援をいただいて、事の成就を願っている次第です。

さて、ご案内のように特別事業として「記念館の大修理」を行うことになりました。記念館は、同窓会の熱意で旧校舎の一部が保存されたものの、改装・整備が十分行き届かなく、このままでは朽ち果てる恐れも出てきていました。

記念館は、明治西洋建築の一つとして、日本近代建築総覧に掲載されており、先頃、某週刊誌にも紹介された貴重な建造物です。そして、小松高校の伝統と誇りを刻んだシンボルでもあります。

伝統は、単なる遺物であってはならないと思います。それは、遺され、伝えられ、生かされなくては意味がありません。先輩の遺したものをわれわれが伝え、後輩の諸君が生かしてくれる。それを願っての「記念館の大修理」だと私は思っています。資料展示室の設置、収蔵庫の新設、階段教室の復元などもすべてその思いから発案されたものです。

「階段教室」につきましては、私は私なりに深い思い入れがあります。あのアカデミックな雰囲気は独特なものがありました。そして、元校長橋本斉祐先生の白衣を着たお姿、化学の授業風景が高校時代の思い出のひとこまとして、まぶたの裏にありありと浮き上がってきます。

橋本先生は、生前、階段教室復元の企画があることをお聞きになって、その実現をとても楽しみにしていらっしゃいました。しかし、百周年を目前にしてお亡くなりになり、残念でなりません。この度の募金に当たって、先生のご意志を受けて、奥様から高額のご寄付をいただいております。

記念物は、建物だけにとどまりません。先輩たちの青春の軌跡がいろいろな形で遺されています。それらの資料を一堂に集めて展示すれば、記念館にミュージアム的な性格も付加されます。

その上、小松高校には、先輩たちが寄せたすばらしい芸術作品が多数所蔵されています。百周年記念行事の一つに同窓生の作品を集めての美術展が企画されていますが、その終了後、出品作をできるだけ母校に寄贈してくださるようお願いしています。そして機会ある毎に展示されて、生徒たちが先輩の美術作品に接することにより、情操豊かな人間に育ってほしいと願っています。そうした美術品を末長く大切に保管するため収蔵庫の新設が取り上げられたのです。

こうした事業は、県当局に要望しても実現の可能性はありません。われわれ同窓生の手による以外にありません。百周年を機に小松高校に学ぶ生徒たちが、伝統の息吹きを体感し、自由な校風のもと、心身ともに健全で自主自律の精神をもった個性ある人間に成長してほしいという願いから生まれたものです。

私は募金係です。僭越ながら記念事業について述べましたのは、この企画に心から賛同し、その実現を願う気持ちからにほかなりません。

募金の趣旨にご賛同いただいた方々から、母校愛の結晶としてのご芳志を順次お寄せいただいておりますが、まだ目標額には遠いようです。経済情勢の厳しいおりではありますが、どうぞご協力をお願いいたします。

今秋の母校創立百周年記念の行事には、多くの同窓生のご参集があって、若々しく盛り上がることを願っています。

（高校8回）

創立九十九周年記念講演

「自分流挑戦」

日建設計理事
松村　健　一（高校10回）

私は一九五八年、小松高校第十回卒業生で松村といいます。建物は変わっていますがこの場所へ来ると当時の色々なことが思い出されます。

生徒会自治会長が「学校に坊主頭を強制する権利があるのか」と運動を起こしたことや、放課後に生徒たちが自主的に開いていた討論会など、私は積極的に参加したものですが、これは印象に残っています。

議論をするということは結局、人の生き方のぶつかり合いであり、他の人間からの影響を受ける、ということだと思います。特に皆さんの年ごろに受けた影響は意識しなくても一生影響を及ぼすものといえます。

当時、「一般社会」という新しい教科ができ、後に小松高校の校長もされた小西先生という社会科の先生が受け持たれたのですが、この先生は生徒に議論させる先生で、質問に対しては先生自身も負けずに議論を交わす、そういう授業をされました。この授業での議論が後の私に社会・政治といったものに関心を持たせる一つの原因になったという気がします。

もう一つ、影響を与えるのが本です。皆さんの中にもあまり本を読んでいない、という方もあるでしょう。しかし高校時代には、少し難しい本を訳がわからなくても、ともかく読み通してみる、といったことが非常に大切なことと思います。受験勉強でそれどころじゃないと思うかも知れませんが、それは決して無駄にならないと思います。

受験勉強では、例えば何年には何が起きた、といった具体的な知識を身につけます。それは大切なことで、ないがしろには出来ません。ただ、その知識を、例えば「社会から貧困を無くす流れ」「女性が平等を獲得していく流れ」といった抽象的な、ものの価値の観点から整理することができるようになると人間は一段進歩します。

そういう抽象的にものを考える基礎習慣を身に付けられるかどうかは高校時代に大きく懸かっていると思います。そして先程述べた人間からの影響、先達が残した本からの影響といったものが抽象化して社会と人間を考える頭を作っていくと考えます。

それができると知識の習得、受験勉強の能率もきっと上がると思います。

先程、後に私が社会、政治といったものに関心を持つようになったと話しましたが、そのきっかけになったのは、一九七二年に地元で起きたバイパス道路建設問題です。

私の住む奈良の斑鳩は皆さんご存じのように歴史ある地でありますが、日本中で盛んに進んでいる開発はこの地にも押し寄せてきました。

私の住む団地の真ん中を二十二メートルのバイパス道路が通るという計画を知り、それまで会社の仕事に明け暮れていた私も、自分の生活のため行動を起こさなければならないと考え、自治会の臨時総会で道路建設反対委員会というものの必要性を提案しました。私の提案は認められ、会は発足しました。

私は、この運動にとって広報というものが大切だと思い、反対委員会の動きや道路問題の動向などを新聞より早く住民に知らせるように努力しました。通勤中にまとめたニュースを帰宅後校正、印刷し、夜中に配り終えるという生活を十カ月続け、住民の信頼を得ていきました。

また、こういう運動ではよくある革新系政党の介入を阻止し、住民中心で運動を進めていきました。

この運動に対し、共感する文化人六十三名の声明や、全国で約十万人の署名も集まり、この道路工事は現在も棚上げ状態のままです。

私はこの運動を通し、政治上の勝った負けたのレベルだけでなく、文化運動としての政治、文化運動としての活動をしたいと思い、会社生活を送る傍らミニコミ誌「ぽっぽ」というものを作り、発行を続けております。これは法隆寺などについての専門家の文章とバイパス問題などの具体的な問題とを突き合せたユニークなものです。

政治と文化は切り離せない、むしろ一体ととらえてこそ人間の社会があるという私の考えを基にしています。

文化という言葉が出ましたので、最後に近代の文化・価値観について話したいと思います。

イギリスで起こった資本主義は、その後のヨーロッパ、アメリカそして日本を含めた国々の指標となりました。効率、スピードを重んじ、産業革命を生んだ科学技術の進歩の中にある社会です。この近代を発展させた資本主義の底には「勤勉に、誠実に働く」という精神が流れていました。

今では、資本主義は金儲けの面だけで捉えられますが、当初は「スピードを早め、能率を上げる勤勉さは、隣人のためになる良いことであり、そういう良いことをした結果としてお金が儲かるのだ」という考えがあったのです。ところがこの「隣人愛」と「利潤の追求」は逆転し、現在のように金のためなら何をしてもかまわない、というような時代を招くことになりました。

生活は豊かに、便利になりましたが心の貧しさを抱えて苦しんでいる人も多く、それは日々のニュースなどを見ていても感じるのではないでしょうか。

近代人は精神的な価値や心の値打ちというものを軽視しすぎており、人間も自然の一部であるということを忘れているのです。科学技術の進歩により生活が便利になることが果たして幸せなのかということをもう一度考えてほしいと思います。自分自身の頭で考え、自分自身を、世の中を考えてみることが大切なのです。

とにかく雑駁なことを色々申しましたが、二十一世紀は皆さんが新しい価値観を開いていく世紀です。これまでのようにモデルはありません。それ故に、どのように生きてゆくのか難しい時代と言えますが、やりがいもあり、挑戦するに値のある時代とも言えます。皆さんはそこへ船出するわけです。私の今日のテーマ「自分流挑戦」はその意味を込めて付けました。皆さん自分自身のその頭で考えて、自分流に新しい時代に挑戦してほしいと思います。

大学受験のための勉強も自分自身の頭で世の中を考える自分流に挑戦するための一つの方法として位置付けて、頑張って下さい。（高校10回）

講師略歴

昭和14年2月生　能美郡国府村上出出身（現・小松市下八里町）
　　小松高校10回卒（昭和33年）。東京大学法学部卒
昭和38年4月　住友金属入社、和歌山製鉄所配属
　　41年10月　〃　本社人事課（以降平成元年三月まで本社〈大阪〉）
　　45年11月　兵庫県西宮市より奈良県斑鳩町に転居
　　47年12月　斑鳩町で住民文化運動開始
　　48年11月　ミニコミ誌『ぽっぽ』創刊
平成元年3月　住友金属退社（総務部次長）
　　元年4月　（株）日建設計入社（現在理事）
著書　『嵐の中のサラリーマン
　　―人間らしさを求めて―』（近代文芸社）
主な受賞　昭和52年　読売賞　佳作「関西の復権」
　　53年　読売ノンフィクション賞
　　最優秀賞「タダの人の運動
　　～斑鳩の実験～」
　　58年　毎日郷土提言賞「文化の町を再び」
　　60年　毎日21世紀賞「人間と環境」

百周年への熱き思い

林　滋

「来年百周年を迎える母校、小松高校の同窓会から封書が届きました。（中略）私は大変失望しました。学校は未来を見据えて、次代を担う若者に、夢と希望を感受せしめるべく激励すべき場と思います。一部の老輩のノスタルジーを満たすために巨費（二億円）は死に金です。記念事業は過去をいたずらに懐かしむことでなく、若者と未来を語り合えるものになればと思うのですが」（後略）。

四月半ば、新学年のはじまった頃、地方紙の意見欄に登載されたとある同窓生の投書である。百周年記念事業については、既に前会長の仲井さんの時から論議を重ね、新会長に若い徳田正彦君を選び、鋭意対策を練られてきたことを知る者にとっては、心ない投書であると腹に据えかねて、七月になってから同じ意見欄に投稿した。「百周年への熱き思い」がそれである。幸い登載されたので目にされた方も多いと思うが、冗長を覚悟で再録させていただく。

『百周年への熱き思い』

「お旅祭りは、小松の伝統あるお祭りである。お旅祭りに行けば、芦城公園から母校小松高校へ足が向く。今年は息子と嫁と二歳になる孫娘と、そして母とで校門前で写真を撮り、天守台まで歩いた。百年といえば一世紀、私が卒業してからでも五十年になる。我が家でも兄弟三人、その子供と嫁たち、同窓生がもう十人にもなる。百年の間の卒業生はやがて三万人になるが、世界に知られた人材も、ごく平凡な市井人も、心の中では小松同窓生であることが誇りになっている。

何年か前から百周年記念事業の検討がなされ、ようやく成案が通知されてきた。三万人の熱い思いが全部叶えられることは望ましいことだが、代表として役員たちの作って頂いた事業には、例え意に満たないところがあっても精一杯協力したいと思う。ノスタ

ルジーを満たすことも結構でしょう。過去を懐かしむことも、温故知新。言葉に出して語らなくても、若者は十分に学び取ってくれる筈。」

芦城公園花見の際に　校門前で家族一同

確かに建物は不滅ではない。そんなところに巨費を投ずることは愚かかも知れない。しかしその中に愛校心を込めて、次代へ、またその次へ残していきたいと思っている。

（中学46回）

戦中戦後真っ二つの学年

本谷　勇

私たち小松中学46回生は今年三月に卒業五十周年を迎え、地元有志のお骨折りで、八月に「小松中学校卒業五十周年記念誌」を発行し九月二十七日には山代温泉でクラス会を開き亡き級友五十五名の法要を行った。

続いての宴会から各部屋に別れてからも五十年前にタイムスリップして払暁に至るまで懐古旧談に花を咲かせた。

『残りが見えてきた』との焦り？も手伝ってか、近年、級友たちと集る機会が多くなったが、よく聞くのは『勉強した思い出は余りなく……かと言って遊んだ記憶も殆どない』との意見である。

想えば、昭和十八年四月の入学から二十三年三月までの五年間は、昭和二十年八月十五日の終戦を境に、前半は二年二学期から飛行場の格納庫造りや小松製作所での戦車作りの勤労動員で夜勤までさせられた二年半であり、後半は先生も生徒も世情と授業内容の激変に戸惑い悩まされ四年生の中頃になって漸く落ち着いたという二年半であり、正に、天変史変の五年であった。

そんな中で、一年生の年は学校から八キロ以内の全校生が徒歩通学させられ同じ学友区の上級生の後ろをハァハァ言いながら登校したり、製作所での夜勤の時に空襲で真っ赤に焼ける富山の空を眺めながら『次は金沢か小松か？』と豆に米が入ったようなオムスビ一個を手に梯川の堤防へ避難するという経験もした。

また、五年の五月に山本校長先生への転勤発令で『金沢二中なんぞに名校長を取られてたまるかッ』と生徒自治会挙げて留任運動を展開し代表が県庁に押し掛けたことなど特殊な思い出が多い。

ところで、俳優の小林旭が♪いい奴ばかりが先に逝く♪どうでもいいのが残される……などと歌ったりするが、どっこい、残っているのもいい奴ばかりである。

そのうえ、ガンで胃を取られたり心筋梗塞で倒れるなど死線をさ迷った後、それらの病魔をねじ伏せながら頑張っている奴が幾人もいるキカン坊学年なのである。

（中学46回）

回　想

川田　正子

学校を卒業してから幾星霜、同級の人も半数は亡くなっています。

昭和の初めに入学した頃は交通不便のため、中学校と女学校に寄宿舎がありました。片山津生まれの雪の博士中谷宇吉郎先生も寄宿舎生活をされたはずです。小松中学はお城のあとに建っていますから、戦に負けた方々のお化けが寄宿舎の廊下に出ると噂したものです。

交通事情も良くなって昭和六年、寄宿舎も廃止になり、その後は自転車通学が多くなり学校内に自転車置き場が設置されました。中学校に運動会があっても女学生は見に行ってはならないと申し渡されたか、隠れて行った方もあったのです。今の人には信じられない古い時代でした。ポプラに囲まれた懐かしい木造の校舎も、乙女の夢を育んだ教室も、戦後なくなりました。

私は今、北海道に住んでいますが、戦前は主人が満鉄勤務だったので苦労して引き揚げてきました。北海道は広い土地で大陸的なところがあります。

オホーツクの海沿ひ走る
電車一輌番屋の如き駅にとまれり

国後の島浸（シタ）しくるオホーツクの潮（ウシオ）両手に掬ひあげたり

このような蝦夷の地に母校を偲びながら生きながらへております。

母校の百周年を心よりお祝い申し上げます。（県女21回）

利常さんと小松

北山　寛子

この夏、シアトルから帰るとき、シアトル日本語補習校の中学生の孫　賢を連れて帰りました。二学期の社会科は北海道から沖縄までを習うことになっていたので、日本についての実地勉強をと思ったからです。夏休みの集中授業を欠席する代わりに、宿題として、「歴史上又は郷土の好きな人物を選んで徹底的に調べよう」とありました。私は孫のレポートの手伝いがてら、「小松城主　前田利常公」について勉強しようと思ったので、郷土史家北野勝次様に資料をお願いしました。

家督を光高に譲り一六四〇年、公四十八才で小松城に入られて、一六五八年六十六才で薨ぜられるまで、小松の文化、殖産興業に尽くされたご

生涯を知りました。利常公は多趣味で、美術工芸を愛好し、名人、名工を招聘して職人たちの技術の向上を図られたので、小松の町人の中にもその影響を受けたものが多くなったといわれ、茶道、華道、謡曲を嗜み、歌舞音曲を愛する風土が培われたのでしょう。お旅祭りの「子供歌舞伎」が曳山上で演ぜられる楽しさは幼心にも格別で、故郷を離れた今も懐かしく、小松の誇りと思われます。

利常公は神仏を崇拝され、菅原道真を祭神として祀られた「小松天満宮」を創建されたときは、名工をお呼びになられ、又宗派を問わず寺院に土地を与えて移転させられたお陰で、お祭り、お寺参りに近在から人々が集まり、賑わったそうです。

小松が城下町として発展し、人々が絹織物、畳表、お茶、九谷焼などの生産・販売にもめざましい活動を行い、今日の小松の基礎が作られたのは、ひとえに利常公によるところ大と思います。祖父母がよく「利常さん」と何かにつけて話し聞かせてくれたことを、戴いた資料をもとにシアトル育ちの孫に語り、一つのレポートに纏めながら、私の育った小松は「歴史があり情緒豊かな町だったんだなあ」と改めて見直しております。

（県女27回）

孫と暮らして

谷川恵美子

思えば、孫の育児に明け暮れた日々。その孫も小学校に入り、ようやく一息つく時間が持てるようになりました。ボケない為にと、孫の指導のもと、六十才半ばでピアノの前に。どうしても左手がついてきてくれません。毎日のわずかな練習でも腱鞘炎になり、老化した体に今更ながら驚きました。

現代は何かと車に頼ることが多く、歩くことが少ないので、ある日、二人の孫を連れて木場潟を一周してみました。白山を近くに眺めながら…、片や湖上では、学生たちのカヌーの練習風景を見ながら…。

汗ばんだ額に当たる風は何ともいえない心地よいものでした。写生をしている人、釣りを楽しんでいる人、一人で、歩いている人、シルバーカップルと、様々な人たちと出逢い、会釈し一声かけながら…。孫たちもダウン寸前になるも、三時間余りかけ最後まで頑張って一周してくれました。

また、小学校の給食会にも参加する機会を得、栄養士、給食係の方達の暖かい心遣いにもふれ、若いお母さん方との楽しいひとときを過ごすこともできました。

孫と暮らして共通の会話が持てることは良い刺激になり、明日への活力にもつながります。高学年になれば孫との距離も遠のいていくことでしょう。今頼られている間、家族の為、自分自身の為、毎日を大切に過ごせたらと思っている今日この頃です。

（市女21回）

川柳

小林　西峯（貞泰）

百歳の投手目指して励む喜寿
畳拭く部屋いっぱいに風を入れ
ぶらさがり機に手遅れな身を吊す
老いて子に従う愚痴を引っ込める
ふらり出て春愁を消す野辺の花
久々に会うて話して誰かいな
妻の留守落ちたぼたんを凝視する
露の世を八十五度もお正月
除夜の鐘十ほど聞いて老いは寝る
花嫁をしわくちゃ姥にして済まぬ　（中学24回）

※小林さんは昨年七月八日に八十九才で亡くなられました。右の十句の川柳は『こまつ川柳』に寄せられた小林さんへの追悼文に紹介された作品を、ご遺族の了承を得て転載したものである。

父からの手紙

石堂　純子

亡くなって八年もたつ父に今年もまた、「天守台」が届いた。開封し、それぞれの方の近況を辿った夜は、不思議と夢の中に父が現れる。ときには母や今はいない家族も加わり、我が家の同窓会となる。名付けて天守台を「父からの手紙」と言っている。

もう高校を卒え四十年になり、人生の仕上げを考える年令になった。洋装関係に興味を持ち実業高校家庭科に入学したが、一年で改編され、小松高校へ編入した。在学中はさしたる思いもなく、母曰く「あひるの行列に加わっているみたい」だった。いま顧みると、人の生涯はトータルで平均化されるようである。

民間から市役所に入り感じたのは、常に給料を戴きながら学べる場であることだった。めざめとしては遅いが、当時の上司に「市民からの問題提起に応えてこそ、公僕といえる」と、身を以て教えられた。終生の師である。そのうち時代が変り、職場に女性の登用が起り、その第一号として渦中に入った。世事に疎く、しかも地で行くしか術のない自分が曲りなりにも来ることができたのは、親やかつての上

司から学んだ、明治の気骨のせいかも知れない。

いま、小松短期大学に籍を置き、微力ながら学校運営に当っている。二十年余の歳月をかけて創設された南加賀唯一の高等教育機関であるが、十一年目を迎えた今日、未だ「小松短大ってどこにあるの」と聞かれる。地域と学校との疎遠な関係を少しでも修復できないかと願いつゝ努めている。折から小松市の強力な支援により短期決戦での学科等の検討に入った。「もう過去を振り向くな」を合言葉に、加納理事長・林学長の経営・教育理念のもとで改革を進めている。文化レベルの尺度とも言える大学を、「もう一度市民の手で確認して戴きたい」と思うほどに胸が痛む。

両親が子に示した、個人より公を、家族より社会を優先した処世訓も遠のきつゝある世にあって、ぎこちないほど変えられない私の様子を案じ、今も父宛の手紙が届くのであろう。よい機会をありがとう。

（高校7回）

短歌

栴檀

西野寿美枝

久に訪ひし母校の栴檀枝張りて寄贈標記の文字はうすれつ
師の校二あこがれましし棟なり秋青空に高く枝張る
穂芒のいまだほけざる赤き穂を白磁の瓶に押して月待つ
山の端に十六夜の月仰ぎつつ病む夫を置き帰るバス待つ
とり鎧ふ山々高き「山中」の暮れ早き病院に夫置き帰る
赤ちゃん星しきり誕生の銀河とぞ芒穂ゆるる土堤を跨ぎて
生涯を共に生くべき永久歯見よと孫来る唇開けて
白玉と言はば言ふべきはなびらの如き艶持つ歯を見せに来る
雲間より長きみすそを引く絵巻想ひ聞きをり笙の雅楽を
老化脳痴呆脳とを比較して語るテレビに秋桜満つ

〝コスモス短歌会同人〟（県女24回）

泣く日のお笑い

大家　信義

年とともに感性が鈍くなるのはしかたがないが、気持ちよく笑うことが少なくなったように思う。

毎年七月九日は笑い学会の総会が開かれるそうだが、「泣く日」にお笑い、というのはちょっとおかしい。

オヤジがまだ元気な頃、妻とこんな話をしていた。

「そろそろキンを買わなきゃ」
「すごいわ」
「すごくないよ、近所はみんな買ってるよ」
「ブルジョアばかりね」
「そうは思えんがな」
「きれいでしょう」
「あれをきれいというのかな、人それぞれよ」
「どこで買うの」
「農協だよ」
「キンを売ってるなんてすごい農協だわ」

おわかりだろうか、オヤジはしいたけの菌、妻はゴールドの金をそれぞれ「キン」と思って話していたのだ。

テレビも時に笑わせてくれる。

三才ぐらいの男の子が本をとろうとするが背のびをしても手が届かない。考えていると「頭をつかうのよ」とお母さんの声、やおら本棚に頭をぶっつけはじめる。これはおかしかった。

そのむかし、男は三日に片頬、といって笑うことを軽んじた時代もあった。

だが、笑う門には福が来る、と庶民の生活の知恵として笑いは根強く貴重でもあった。

笑うことで身心がリラックスし自然治癒力が高まる、というのは今や定説になりつつあるようだ。機会をみつけ一日一善ならぬ一日三笑ぐらいは心がけたいものだ。

笑いといえばテレビでみる政治家のみなさん、殆んど笑っていますね。消費税を引き上げる時も、年金を改悪する時も顔は笑っているようでも眼は笑っていません。この笑いはこわい、黒い笑いとでもいうのでしょうか。（高校10回）

平凡な日々の中のうれしさ

山木　泉

絵本を何冊も読まされて、「早く寝てよお～」と思いながら、やがてすうっと眠りについた二人の娘の顔をみて、「今日も一日終わった。フー。ごくろうさん。」と自分に言いたくなる親業六年目です。

子育てハチャメチャ期第一部が終ったかなあという今日この頃です。四才五才と年子の娘達には鍛えられました。子どもは前向きで純粋で行動的で「えらいっ」と感動するのですが、すぐ泣く、怒る、さっさと○○（色々入ります）しないことにつき合うにはかなりの辛抱が必要です。

病気といえば、多少マイナスのイメージがあるのですが、子どもの病気は母親をとても冷静に、前向きに、忍耐強く、そして賢くしてくれるようです。アトピー、中耳炎、喘息、発熱の症状が出た時「この子はこうしてあげれば落ち着く」というのも何回かの経験で分かってきますし、食べものや住まいなど毎日の暮らしを見直すよいきっかけとなります。

今、仕事、家事、育児を無器用ではありますが、なんとか無事一日こなせるようになったのも、夫、友達、まわりの優しいたくましい先輩の方々の支えがあってこそです。

フルタイムで元気よく働く工場のおばちゃん達、夕方の混み合うスーパーのレジで並ぶ制服や作業服を着た主婦、あばれる子ども達を抱えて小児科や耳鼻科でじっと待つ母親――家族のいのちを支えている強い女の生き様をこの子育てグチャグチャ期にしっかり見たような気がします。

学年の同窓会を企画できたのも少しばかり気もちの余裕が出てきたからだと思えます。工作、手芸、小旅行、キャンプ等家族や友人と一緒に心の栄養となる遊びを今年はもっと増やしていきたいと欲張っています。（高校35回）

美術展巡り

松尾　博子

「あっ。」

口の端でそう呟くなり、私は声も出せずに立ちつくしてしまいました。彼の写真に圧倒されてしまったのです。彼――星野道夫の世界展へ行った時のことです。

大学進学を機に、住み慣れた小松市を離れ、東京へ移り住んでから、はや二年。学業の合間を縫って出かける美術展巡りが楽しみで、今までに、伊能忠敬展や大歌麿展などをはじめ、数々の美術展に出かけました。その中でも特に印象に残ったのが星野道夫の世界展でした。

星野氏は96年にクマに襲われて急逝した国際的写真家で、極北に生きる動物の生き様や大自然の有り様をカメラに収め続けたことで知られています。私は彼の名前こそ知っていましたが、その作品は見たことがなかったので、とても楽しみにして写真展へ出かけました。そして、彼の写真をまのあたりにした時、私は声を発することができない程の感動でいっぱいになったのです。

風化したクジラの骨、群れをなすカリブー、野性の鋭さに溢れたワシ、戯れる白くま、川を遡上してきたサケとそれを待ち構えるクマ。極北の一カット一カットを見ているというよりはむしろ、自分が極北の大自然の中に放り込まれたかのような気がして、長い間写真に見入ってしまいました。

星野氏にはなぜこのように素晴らしい写真が撮れたのでしょうか。彼が極北の大自然と一体化していたから――彼の写真を見ているとこのように思えてなりませんでした。また、だからこそ彼がクマに襲われて最期を遂げたということもある種の説得力があるように思います。

星野氏の作品は写真集になって書店に置かれているのでできるだけ多くの人に見てもらえたらと思います。また、私自身も、これからも多くの美術展へ足を運び、教養を身に付けていきたいと思っています。（高校49回）

小松中学関東同窓会開催

平成十年十月二十三日（金）正午より、四谷の「スクワール麹町」において、46回卒の私たちが幹事を務め、盛大に開催された。

本谷勇君の司会により、幹事代表として私関戸が挨拶し、物故者の冥福を祈って黙禱を捧げた後、28回卒の佐藤洋大先輩の発声で乾杯して発会した。

出席者は、28回の佐藤様、29回の林美治・山口操助両先輩をはじめ三十三名であった。この会は小松中学として入学した49回（高校4回）卒までであり、先細りの寂しさが感じられる。

酒間に一人ずつ自己紹介と近況を発表してもらったが、それぞれ活発で会が盛り上がった。特に山口画伯の日中戦争での生死をさまよう負傷と、指二本が動かない右手で画を描き続け、二期会理事として活躍しておられるお話には深い感銘を覚えた。

懇親会後記念撮影をし、校歌と門出の歌を歌い、次回幹事の47回生にバトンタッチとして校旗を手渡した。ちなみにこの校旗は47回生が保管しているものであり、懇親会の間正面に飾り、校歌等の応援旗として非常に役に立った。

また、会場のスクワール麹町は東京都所管の施設であり、都のOBである45回生の林仁作先輩に大変お世話になったことを、ご紹介すると共に、紙面を借りて厚く御礼申し上げる次第です。

関戸研一記（中学46回）

第十一期生関東地区同窓会便り

昭和三十四年三月高校卒業の十一期生のうち関東地区在住の我々は昭和五十一年から年一回同窓会を開いています。

今年は十月三十一日（土）に東京は上野、不忍池近くの「水月ホテル鷗外荘」（邸内に森鷗外の住んでいた居宅が保存されていることで有名）に十九名が集まって賑やかに楽しく語り合いました。

①年一回十月最終土曜日に集合。②集まった時が同窓会で難しい規約なし。③会の終わりに全員で校歌を斉唱して解散。というのが慣例になっています。

今年は二十五回目の節目の会合でしたので、出欠ハガキの裏面スペースを広く取り、近況報告に限らず、短歌、詩、紀行文、エッセイなど何でも書いてもらい、それをそのままコピーして、「ミニ文集」として皆に配りましたが、大変好評でした。

五十代も半ばをすぎ、男性は第二の職場に移った人が多く、女性は孫のいる人もあり、山歩きや札所巡りを楽しんでいる人あり、ボランティア活動に汗を流している人ありと、男性よりは多彩な活躍です。総じて皆さん落ち着いた生活を送っておられるように見受けられました。

最後に僭越ながら小生の拙文を披露させていただきます。

「先日帰省した折、久しぶりに母校を訪ねた。今度の集まりで皆さんに配ろうと思い、本部同窓会の会報『天守台』を貰いに行ったのだが、幸い余部があり快く分けて頂いた。九月下旬だったので未だ夏服姿の小松高生何人かと校門付近で会った。四十年前の自分の姿と重ね合わせ、懐かしさがこみ上げてくるのを禁じ得なかった。

帰り途、芦城公園内にある新木栄吉氏の記念碑に立ち寄った。「世に功名を競う人は多いが、徳行の人は少ない」と始まる碑文は実に名文である。時の日銀総裁山際正道氏の名前になっているが、実際は安岡正篤氏の撰文だという。また隣に彫られた和田市長の讃も良い文章だと思う。昭和三十五年九月の建立だから我々の在学中には無かったものである。後輩の小松高生達にも是非熟読吟味して欲しいなと思いながら公園を後にした。」

上田次兵衛記（高校11回）

小松同窓会総会開催

平成十年度小松同窓会総会は七月十三日（月）、小松市日の出町のホテルサンルート小松で開催されました。

高校25回の打和浩之氏の司会のもと、午後六時に副会長の西紀幸氏（高校11回）により開会が宣言され、徳田八十吉会長（高校4回）が挨拶に立ち、いよいよ翌年に迫った創立百周年記念大会に向けての募金協力への呼びかけが行われました。

続いてこの春から新たに校長に就任した瀬川幸三校長（高校10回）が、学校の近況報告、新校舎建設に向けての構想などを述べ、同窓会員のますますの支援を要請されました。

総会での議事に移り、会務報告、決算報告、会計監査報告、予算案が審議され、全会一致で承認されました。その後百周年記念事業各委員会からの報告となり、堀口外茂雄募金委員長（高校8回）からは募金に関しての年代ごとの具体的な目標額の提示とお願いが行われました。西紀幸名簿委員長からは名簿作成に向けての具体的な作業日程の説明が行われ、江口介一資料展委員長（高校17回）からは、新装される記念館で開催予定の資料展における展示資料の貸与の依頼がありました。

引き続き、宮川恒氏（中学26回）の乾杯で懇親会の幕が開き、二七二名の参加者一同久しぶりの再会を祝し、和気藹々と夏の一夜の酒宴に打ち興じました。

時間は瞬く間に過ぎ去り宴もたけなわの頃、恒例の四校の校歌斉唱となり、伊東清雄氏（中学31回）の万歳三唱で盛況のうちに閉会しました。

本部だより

◇明けましておめでとうございます。本年も同窓会報『天守台』に変わらぬご支援・ご協力のほどをよろしく。

◇平成十年秋の褒賞受賞で土中幸雄氏（中学45回）に黄綬褒賞が与えられました。同じく秋の叙勲では岡山丕彦氏（中学38回）と山上公一氏（中学40回）が勲五等双光旭日賞に、中出民子氏（高校8回）が勲六等宝冠賞に叙せられました。また、第三十一回北国芸能賞に麦谷清一郎氏（高校8回）が受賞されました。おめでとうございます。

◇本会報委員会編集委員の一員で平成八年度から同窓会庶務の任にもあった三島明子さん（市女21回）が、昨年十一月に急逝されました。三島さんは『天守台』創刊当時から編集委員として市女卒業生への寄稿依頼、編集を一手に受け持たれ、同会報委員会にとっては欠かすことのできない方でした。ご冥福をお祈り申し上げます。

◇昨年末で百周年に向けての募金総額が一億四千万円を突破しました。目標の二億円へ向けて、さらに会員各位の力を結集していきましょう。次号は百周年記念特別号として紙面をさらに充実し、発行部数も大増刷する予定です。

第18号の原稿募集

◎〆切　平成11年5月30日
◎内容　自由（六百字程度）
◎送先　〒九二三－八六四六
小松市丸内町二の丸十五
小松高校同窓会事務局宛
◎発行　平成11年7月